

## ■ 実践報告

保健体育科教員養成課程における教育実習の  
成果と課題に関する事例報告

松本 佑介\*  
 寶學 淳矢\*  
 白井 達子\*  
 安部 敬一\*  
 服部 一夫\*  
 瀧本 大輔\*  
 外林 大川\*  
 星川 佳加\*

## 【要約】

本稿は、大阪成蹊大学教育学部教育学科中等教育専攻保健体育教育コースにおける教育実習について、2022年度を中心に、これまでの成果と課題を報告するものである。2020年度から2022年度までの3年間で教育実習に参加した学生は計126名（2020年度45名、2021年度43名、2022年度38名）であり、実習校から返却された成績評価票を用いて、教育実習の成果と課題を検討した。その結果、保健体育教育コースにおける教育実習の成果として、3年間を通して、実習校から一定の評価を受けていること、これまでの継続した指導によって、「勤務態度・熱意」に関する高い評価を受けていることが挙げられた。一方課題としては、教育実習を迎えるまでに、模擬授業等を通して「学習指導の基礎的技術」をある程度身に付けさせること、1年次・2年次生が教育実習を見据えて、大学における学修に励むことができるよう支援することが考えられた。

キーワード 保健体育科教員養成課程、教育実習、教育実習生

## I. はじめに

本稿は、大阪成蹊大学教育学部教育学科中等教育専攻保健体育教育コース（以下、本コースと略す）における教育実習について、2022年度を中心に、これまでの成果と課題を報告するものである。

教育実習は、観察・参加・実習という方法で教育実践に関わることを通して、教育者としての愛情と使命感を深め、将来教員になるうえでの能力や適性を考えるとともに課題を自覚する機会である<sup>1)</sup>。また、一定の実践的指導力を有する指導教員のもとで体験を積み、学校教育の実際を体験的・総合的に理解し、教育実践ならびに教育実践研究の基礎的な能力と態度を身に付けることを目的としている<sup>1)</sup>。

中央教育審議会<sup>2)</sup>は、教員養成大学・学部における教育実習について、3年次後期に実施すること

が多く、その一部は学校体験活動<sup>注1)</sup>で代替可能であるとしている。本コースでは、2年次後期から3年次前期にかけて、中学校における学校体験活動を計20日間行う。そしてその後の3年次後期、あるいは、4年次前期に、同一の中学校にて、学生は2週間（計10日間）の教育実習に臨むことを基本としている。また、教育実習の目標として、教育実習生として教科の指導、学習指導案の作成、学級活動の指導等の教育活動に参画することで、学校教育の実際を体験的に学び、教育実践力を身に付けるとともに、教員としての職務の一端に触れ、教職についての理解を深めることを掲げている<sup>3)</sup>。

本コースは、2018年度から学生募集を開始しており、2020年度において、初めて学生が教育実習を行った。2023年9月現在までに、1期生から3期生までが教育実習を終えている。本稿では、本

\* 大阪成蹊大学 教育学部

コースにおける教育実習の成果と課題を報告することを通して、これまでの取り組みを評価したうえで、今後の展望について述べることとする。

## Ⅱ. 研究の方法

### 1. 対象者および収集したデータ

2020年度から2022年度までの教育実習に参加した学生は計126名(2020年度45名、2021年度43名、2022年度38名)であり、全員が中学校において実習を行った。教育実習において学生は、実習校の教員の指導を受け、その取り組みを評価されることになるが、この評価は教員養成課程を充実、改善、発展させるための有益な一資料となり得る<sup>4)</sup>。そこで本稿では、教育実習の成果と課題を検討するための評価資料として、実習校から返却された成績評価票を用いた。この成績評価票は、総合評価と計10項目の評価(以下、各項目評価と略す)から構成される(表1および表2)。総合評価については、「非常に優れている」、「優れている」、「適切である」、「努力を要する」、「努力が認められない」の5段階

から選択することとした。また、各項目評価に対しては、A・B・C・Dの4段階で評価を求めた。

なお、各項目評価については、2021年度および2022年度の成績評価票において、2020年度のものから内容を大きく変更していた。この変更の意図については把握できていないが、学校体験活動の導入に伴い、学内において、成績評価票を含めた実習関連事項が検討されていた時期であったことを付言しておく。

さらに、各学生の3年次前期までの大学における成績(以下、GPAと略す)に関するデータも併せて収集し、教育実習の評価との関連を検討した。

### 2. 分析の手続き

総合評価については、3年間の経年変化を検討するために、一元配置分散分析を用いて分析した。また、先述のように、各項目評価については、2021年度および2022年度の成績評価票において、2020年度のものから内容を大きく変更していた。そのため、2020年度のデータは分析には用いず、2021年度および2022年度における各項目評価の平均値

表1 2020年度における成績評価票の内容

①	総合評価
②	教材教育分野の科目の学習指導要領や教科書など内容について理解している。／指導案の作成に関する基礎的な知識を習得している。(基礎知識・基礎学力)
③	教科書にある題材や単元等に応じた教材・資料を分析し、教材研究を生かした授業を構想し、生徒の反応を想定して指導案を開発・作成することができる。(教材研究・指導計画)
④	教材教具の提示、板書や発問、的確な話し方など授業を行う上での基本的な表現の技術を身に付けている。／生徒の反応を生かし、皆で協力しながら授業を展開することができる。(指導技術・態度)
⑤	他者の意見やアドバイスを耳を傾け、理解や協力を得て課題に取り組むことができる。(指導後の評価・反省)
⑥	生徒理解のために必要な心理・発達論の基礎知識を習得し、発達段階を考慮して、適切に接することができる。／どの生徒にも、公平で受容的な態度で接することができる。(生徒の理解)
⑦	学習集団形成に必要な基礎理論・知識を習得している。／学級経営・学級づくりについての基礎的な知識を習得している。／学級経営案を作成することができる。(個別・集団指導)
⑧	特別活動(学級活動・生徒会活動・クラブ活動・学校行事)などの内容に関する基礎理論・知識を習得しており、どの指導も意欲的・自主的に行うことができる。(その他の教育活動)
⑨	他者と共同して、授業の企画・運営・展開や、課題に取り組み、率先して自らの役割をこなすことができる。／挨拶、言葉遣い、服装、他の人への接し方など、社会人としての基本的な事項が身に付いている。(勤務態度・熱意)
⑩	事務処理が効率よく、的確にできる。／各種レポート・教育実習記録・書類などを的確に記述し、期限を守って提出した。(事務・実務の処理)
⑪	教職員、保護者や地域との連携・協力の重要性を理解している。／人権教育への理解を深め、いじめ、不登校、特別支援教育などについて、個々の生徒の特性や状況に応じて、積極的に関わろうとしている。(教育的視野)

表2 2021年度および2022年度における成績評価票の内容

①	総合評価
②	生徒との関わりを通して、その実態や課題を把握することができる。(生徒理解)
③	指導教員等の実施する授業を視点をもって観察し、事実即して記録することができる。(授業研究)
④	実習校の学校経営方針及び特色ある教育活動並びにそれらを実施するための組織体制について理解している。(学校経営)
⑤	学級担任・教科指導教員等の補助的な役割を担うことができる。(教育活動への参加)
⑥	学習指導要領及び生徒の実態等を踏まえた適切な学習指導案を作成し、授業を実践することができる。(学習指導案の作成)
⑦	学習指導に必要な基礎的技術(話法・板書・学習形態・授業展開・環境構成・安全への配慮など)を実地に即して身に付けるとともに、適切な場面で情報機器を活用することができる。(学習指導の基礎的技術)
⑧	学級担任・教科指導教員等の学級や学習集団づくりにおける役割と職務内容を实地に即して理解している。(学級経営)
⑨	教科指導以外の様々な場面で適切に生徒と関わることができる。(生徒指導)
⑩	法令を遵守し、挨拶、言葉遣い、服装、他の人への接し方など、教員に求められる基本的な事項が身に付いている。(勤務態度・熱意)
⑪	各種レポート・教育実習記録・書類などを的確に記述し、期限を守って提出することができる。(事務・実務の処理)

について、対応のないt検定を行った。加えて、2022年度における総合評価と各項目評価それぞれの数値とGPAとの関連について、ピアソンの相関分析を用いて検討した。

### Ⅲ. 結果

#### 1. 総合評価の経年変化

2020年度から2022年度までの総合評価の変化を表3に示した。過去3年間において、総合評価が高かった順に2022年度、2020年度、2021年度となったが、有意な差は認められなかった。

表3 総合評価の経年変化

2020年度	2021年度	2022年度	F値	P値	効果量
3.69±0.91	3.60±0.94	3.97±0.93	1.68	0.19	0.02

#### 2. 各項目評価の経年変化

各項目評価の経年変化を表4に示した。8項目においては、2021年度と比較して、2022年度の得点が高かったものの、すべての項目において有意な差は認められなかった。

表4 各項目評価の経年変化

	2021年度	2022年度	T値	P値	効果量
生徒理解	3.33±0.67	3.58±0.54	1.83	0.07	0.20
授業研究	3.33±0.64	3.53±0.55	1.49	0.14	0.17
学校経営	3.19±0.58	3.21±0.52	0.20	0.85	0.02
教育活動への参加	3.56±0.62	3.55±0.64	0.04	0.97	0.00
学習指導案の作成	3.16±0.71	3.32±0.83	0.88	0.38	0.10
学習指導の基礎的技術	3.02±0.70	3.11±0.68	0.53	0.60	0.06
学級経営	3.19±0.58	3.42±0.54	1.85	0.07	0.20
生徒指導	3.37±0.62	3.50±0.55	0.86	0.39	0.10
勤務態度・熱意	3.49±0.69	3.63±0.70	0.91	0.37	0.10
事務・実務の処理	3.42±0.78	3.42±0.78	0.01	0.99	0.01

#### 3. 2022年度におけるGPAと総合評価／各項目評価の関連

2022年度におけるGPAと総合評価／各項目評価それぞれの関連を表5に示した。GPAと「総合評価」、そして「学習指導案の作成」との関連におい

て、有意な相関関係が認められた。

表5 2022年度におけるGPAと総合評価／各評価項目の関連

項目	相関係数	P値
総合評価	-0.32	0.048
生徒理解	-0.06	0.708
授業研究	-0.13	0.427
学校経営	-0.15	0.369
教育活動への参加	-0.05	0.744
学習指導案の作成	-0.35	0.030
学習指導の基礎的技術	-0.13	0.453
学級経営	-0.03	0.861
生徒指導	-0.09	0.591
勤務態度・熱意	-0.06	0.726
事務・実務の処理	-0.08	0.619

### Ⅳ. 考察

まず、総合評価の経年変化について、本稿では有意な変化は認められなかった。他方で、本稿と同様の5段階総合評価を用いて、中学校保健体育科教育実習について検討している先行研究として、管見の限りでは唯一、寺田ほか<sup>4)</sup>が挙げられる。寺田ほか<sup>4)</sup>では、2019年度から2021年度までの3年間において、教育実習の5段階総合評価が2019年度3.77、2020年度4.00、2021年度3.86であったと報告されている。この結果と本コースにおける総合評価を比較すると、概ね同程度であったと捉えられる。これらのことから、本コースでは、2020年度から2022年度までの3年間を通じて、教育実習について、実習校から一定の評価を受けていたといえよう。

次に、各項目評価の経年変化について、本稿では2021年度と2022年度において、有意な差は認められなかった。そのため今後、各項目評価を向上させることができるよう、大学における授業等の改善が求められる。この改善に向けて、2022年度において評価が最も低かった項目に着目すると、「学習指導の基礎的技術」であった。「学習指導の基礎的技術」について、大学における模擬授業の量と質が十分に確保されていたかが、教育実習の評価に大きな影響を及ぼすとされる<sup>4)</sup>。したがって、本コースにおいて、模擬授業を実施する科目である「中等保健体育科指導法」を改善することが求められる。他方で、米村ほか<sup>5)</sup>は、教科指導に関わる重要な指導技術について、教員養成課程の短い期間では十分身に付かないと述べている。このことから、大学における模擬授業や教育実習ののちも継続的に、学生が「学習指導の基礎的技術」を高められる機会を設けることが重要であると推察される。

一方で、2022年度において評価が最も高かった

項目として、「勤務態度・熱意」が挙げられた。教育実習等で学生が学校現場に行く機会が多くある中で、学生に心構えや将来教育に関わる者としての基本的リテラシーを指導するのは、各大学の責務であるとされる<sup>2)</sup>。保健体育科教育実習生は一般的に、自律的な勤務ができ、教育的熱意があるという評価を受ける傾向にあるとされるが<sup>4)</sup>、このことを差し引いても、「勤務態度・熱意」について、実習校から高く評価されていることは、本コースにおける教育実習の成果と捉えることができる。この背景として、本コースの学生が、2年次後期という早い段階から、学校体験活動として学校現場で実習を行っていることが考えられる。具体的には、大学として学生に対し、学校現場における態度等を継続的に指導している。また、実習校からも、教員としての心構えについて、早期から継続した指導を受けたり、学生が実習校の教員をロールモデルとして参考にしたりしていることを耳にする。このように、2年次後期の学校体験活動から、3年次後期の教育実習に至るまで、大学と実習校の双方から継続的な指導を受けていることが、学生の「勤務態度・熱意」の高さに繋がっていると思われる。

続いて、2022年度におけるGPAと総合評価／各評価項目の関連について、教育実習直前までのGPAと、「総合評価」、「学習指導案の作成」に相関関係が認められた。すなわち、大学における授業の成績が良い学生は、教育実習においても高い評価を受ける傾向にあること、また、そのような学生は、学習指導案を作成する能力に優れている傾向があることが窺えた。教育実習において学生は、実習生という立場ではあるものの、生徒にとって貴重な授業の一端を担うことになる。この授業を充実したものにするための基盤となる要素の1つとして、学習指導案が考えられる。これらを踏まえて、本コースとして、1年次・2年次の学生に対し、教育実習を見据えて、それまでの大学における学修に熱心に励むことを通して、授業実践の基盤となる学習指導案を作成する際に必要な知識・技能等が身に付けられるように指導することの重要性が示唆された。

## V. まとめと今後の課題

以上、本コースにおける教育実習について、2022年度を中心に、これまでの成果と課題を報告してきた。成果としては、3年間を通して、実習校から一定の評価を受けていること、これまでの継続した指導によって、「勤務態度・熱意」に関する高い評価を受けていることが挙げられた。一方課題として

は、教育実習を迎えるまでに、模擬授業等を通して「学習指導の基礎的技術」をある程度身に付けさせること、1年次・2年次生が教育実習を見据えて、大学における学修に励むことができるよう支援することが考えられた。

本報告の限界として、定量的なデータのみでの検討に留まったことが挙げられる。成績評価票における指導教員の総合所見といった定性的なデータからも、教育実習の成果と課題を検討していくことが重要である。また、学校体験活動に関する成果と課題について検討することも求められる。今後、本報告のように、本コースにおける学修を継続的に検証し、学生の教員としての成長を支援し続けていくことが必要である。

### 注

- 1) 学校体験活動は、「学校における教育活動その他の校務に関する補助、または、放課後・休日等の学習その他の活動の補助を体験する活動」<sup>2)</sup>である。

### 引用文献

- 1) 教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会. [https://www.mext.go.jp/compon ent/b\\_menu/shingi/ toushin/\\_ icsFiles/afielfile/20 17/11/27/1398442\\_1 \\_3.pdf](https://www.mext.go.jp/compon ent/b_menu/shingi/ toushin/_ icsFiles/afielfile/20 17/11/27/1398442_1 _3.pdf), (参照 2023-9-21).
- 2) 中央教育審議会. 「令和の日本型学校教育」を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について—「新たな教師の学びの姿」の実現と、多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成—(答申). [https://www.mext.go.jp/content/20221219-mxt\\_kyoikujinzai01-1412985\\_00004-1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20221219-mxt_kyoikujinzai01-1412985_00004-1.pdf), (参照 2023-9-22).
- 3) 大阪成蹊大学. 履修ガイド 2023. [https://univ.osaka-seikei.jp/students/pdf/guide\\_univ.pdf](https://univ.osaka-seikei.jp/students/pdf/guide_univ.pdf), (参照 2023-9-18).
- 4) 寺田進志, 前河泰正, 永野翔大, 田中純. 2019年度から2021年度の保健体育科教員養成課程における教育実習生の評価と概評の考察. 『国際研究論叢』. 2023, vol.36, no.2, p.35-53.
- 5) 米村耕平, 有馬道久, 柴田昭二, 七條正典, 野崎武司, 坂井聡, 大西えい子, 寺岡英郎, 大嶋和彦, 齋藤知子, 西宇宏美, 奈良早苗. 附属教員の意識調査からみる1年間の教育実習に期待される効果と実現に向けた取り組みのあり方. 『香川大学教育実践総合研究』. 2011, vol.23, p.125-130.
- 6) 上地完治, 村上呂里, 吉田安規良, 津田正之, 浅井玲子, 道田泰司. 学部教員養成教育と教育実習の接続に関する質的研究. 『研究論文集—教育系・文系の九州地区国立大学間連携論文集—』, 2009, vol.2, no.2, p.115-133.

A Case Study Report on the Achievements and Challenges of Teaching Practice  
in the Health and Physical Education Pre-Service Teacher Training Course

MATSUMOTO Yusuke\*  
HOUGAKU Atsurou\*  
USUI Tatsuya\*  
ABE Keiko\*  
HATTORI Keiichi\*  
TAKIMOTO Kazuo\*  
SOTOBAYASHI Daisuke\*  
HOSHIKAWA Yoshika\*

**Abstract :**

This study reports on the achievements and challenges of teaching practice in the Health and Physical Education Course of the Department of Secondary Education, Faculty of Education, Osaka Seikei University for the academic year (AY) 2022. A total of 126 students (45 in AY 2020, 43 in AY 2021, and 38 in AY 2022) participated in teaching practice over the three years from AY 2020 to AY 2022. Based on the performance evaluation forms returned from the training schools, we examined the results and challenges of the teaching practice. The results indicated that the students have received a certain level of evaluation from the training schools throughout the three years. Additionally, they have received high evaluations regarding their “working attitude and enthusiasm”. However, issues to be addressed include assistance for first- and second-year students in acquiring a minimum level of “basic skills for teaching learning” through mock classes and so on, prior to their educational training, and greater support in the teaching practice aspect of their studies.

**Key words :**

Health and physical education teacher training course, Teaching practice, Pre-service teacher

---

\* Osaka Seikei University, Faculty of Education